

対外関係と博多の港

佐伯弘次

はじめに

博多第 221 次調査地点で大規模な石積み遺構が発見された。発掘所見によると、11 世紀後半から 12 世紀前半にかけてのものであるという。また築造技術は日本のものではなく、中国のものであるという。この時期は、日本では平安時代の末期で、中世の初期という時期であり、日宋貿易が活発な時期であった。したがって、この大規模な石積み遺構の築造は、日宋貿易と深く関わっていることが想定される。

この石積み遺構の築造を物語る文献史料は現時点では発見されていない。したがって、遺構は存在するが、その性格や位置づけがよくわからないという特徴がある。本稿では、この石積み遺構の築造された時代背景について、都市博多や日宋貿易の様相を中心に考えていきたい。また、今回の発掘地点から、博多大乗寺に関わる遺物や墓地が出土している。こうした関係から、中世の博多大乗寺についても言及したい。

「博多」という地名の初見は、『続日本紀』天平宝字 3 年（759）3 月庚寅（24 日）条に見える「博多大津」である。「博多大津及び壱岐・対馬等の要害の処に船 100 隻以上を置いて不慮に備えることになっているが、今は使用できる船がない」という言上を大宰府が行っている。当時、博多大津はすでに要害の地と認識されていた。「博多」には、都市としての博多と博多湾一帯という広い意味での博多という意味がある。この奈良時代の「博多大津」は後者の意味合いであろう。したがって、都市という意味がいつ「博多」に込められたのか、言葉を変えると、博多がいつ都市化したのかを考える必要がある。

貞観 11 年（869）5 月 22 日に新羅海賊が博多津を襲撃し、豊前国年貢絹綿を略奪し、逃走するという事件が起こった。朝廷は博多の警固を強化するが、その関係史料に、「博多是隣国輻輳之津、警固武衛之要」という記述がある（『日本三代実録』貞観 11 年 12 月 28 日条）。博多は外国から人や物が集まる港であり、警固すべき要地であるというのである。これは、貿易港であり、かつ異国警固の要地であるという 13 世紀後半以降の博多の性格と共通するものである。寛平年間にも新羅海賊の活動が活発となり、北部九州が襲撃された。同 7 年（895）3 月 13 日の太政官符に、「博多警固所」に夷俘 50 人を増員することが命じられた（『類聚三代格』巻 18）。こうした新羅海賊の襲来を契機として、博多警固所が設置されていた。寛仁 3 年（1019）4 月の刀伊の入寇の時にも警固所が攻防の要となっている（『朝野群載』巻 20、寛仁 3 年 4 月 16 日大宰府解）。こうした対外的な緊張の中でも、唐商人の大宰府鴻臚館への来航は活発に行われた。

1. 日宋貿易と博多

(1) 日宋貿易の展開と博多の都市化

宋が中国で建国されるのは、西暦 960 年のことである。大宰府鴻臚館に来航していた唐や呉越国の商人の後、宋の商人が来航するようになった。例えば、寛和 2 年（986）7 月には、僧裔然が宋商鄭仁徳の船に便乗して帰国した（「梅檀釈迦文仏像略讃」）。永延元年（987）10 月 26 日には宋商朱仁聡が

来着している（『扶桑略記』永延元年10月26日条）。10世紀後半から、日宋貿易は鴻臚館を中心にして行われていた。

宋船の来航先は、多くは大宰府つまり大宰府管内であったが、若狭・但馬・越前（敦賀）・伯耆等の日本海岸にも来航することもあった（田島編 1993）。また、平氏政権の時代には、宋船は瀬戸内海に入り、大輪田泊などに入港している。大宰府管内というのは九州一円であるが、宋船は北部九州、とくに大宰府に至近の博多を目指したと考えられる。

今回、博多221次調査地点で発見された石積み遺構の年代観は、11世紀後半から12世紀前半にかけてとされている。したがって、この時期の日宋貿易と博多の関係について検討する必要がある。

博多の都市化については、11世紀後半という説が有力である。その根拠は、11世紀後半になると、博多遺跡群で遺構・遺物が激増することである（大庭 2019）。これと対照的に、11世紀中頃、鴻臚館での遺構・遺物が急に絶える。つまり貿易拠点が鴻臚館から博多に移行するという想定である。時代は下るが、仁平元年（1151）9月の大宰府による管崎・博多の大追捕の関係史料に、大宰府の500余騎の軍兵が管崎・博多に攻め入り、大追捕を行った時、「宋人王昇後家より始めて、千六百家の資材雑物を運び取り」とある（『宮寺縁事抄』管崎造営事）。12世紀半ばには、管崎（箱崎）から博多にかけて少なくとも1600軒の家が存在したわけであり、博多の都市化を文献的に傍証するものである。なお、「後家」は一般的に未亡人を意味するが、この史料の後家は「主人が留守となった家およびそれを管理する経営体（家族）」と解釈すべきという考え方もある（渡邊 2012）。いずれの解釈でも意味は通じるが、東京大学史料編纂所のデータベースで平安期の「後家」の使用事例を調べると、未亡人の意がほとんどであり、取りあえず通説のように理解しておきたい。

11世紀後半といえば、日宋貿易が活発に行われた時期であり、博多の都市化の重要な要因は、大宰府鴻臚館の廃絶と博多地区への貿易拠点の移動であったといえる。

（2）唐房と博多綱首

日宋貿易の時代、博多には「唐房」という中国人居留地が形成され、博多綱首という宋商人が博多に居住して、貿易に従事した。博多津は日宋貿易における主要貿易港であったが、そこに宋商人が居住するようになり、中国人街が形成された。承德元年（1097）閏正月に大宰権帥源経信が大宰府で没した時、「博多に侍りける唐人どもの数多詣で来て弔いける」（『散木奇歌集』六）＝博多に居住していた唐人（宋人）たちが沢山弔問に来たという記事から、11世紀末には博多に多くの宋人が居住していたことが知られる（森 2008）。

博多の「唐房」については、永久4年（1116）5月の仏典に、「筑前国薄多（博多）津唐房大山船龔三郎船頭房」（『両卷疏知礼記』、『観音玄義疏記』）とあり、12世紀前半には確実に存在していた。また、先の源経信に関しては、経信が「ハナカタの唐防で宋人が琵琶を弾くのを聞いたところ、虻が障子に当たる音に似ていた」と語ったというエピソードが伝わっている（『教訓抄』巻8）。この「ハナカタ」は、博多という説と宗像という説があるが、唐房に宋人が居住し、宋の文化が直輸入されていた。このエピソードが正しいとすると、大宰権帥源経信の大宰府滞在中、つまり大宰府下向の嘉保2年（1095）から現地で没する承德元年（1097）閏正月までの間にすでに唐房が形成されていたことになる。

長承元年（1132）には唐坊が焼かれたことがあるし、仁平元年（1151）の管崎・博多の大追捕の記事が掲載される「宮寺縁事抄」には、「運取唐坊在家之資財」という文言がある（渡邊 2012）。これは、「運取千六百家資財雑物」と対応する文言であり、唐坊が「千六百家」の中に含まれることを示している。仁安3年（1168）2月8日、栄西は「博多唐房」に来て、入宋を期した（榎本 2005）。このよ

うに博多の「唐房」「唐坊」は、11世紀末から12世紀後半にかけて史料的に確認される。

博多津唐房に関しては、考古学の立場からの研究がある。墨書陶磁器の時期的な分布状況等から、12世紀前半までの唐坊は博多浜西側にあったが、12世紀中ごろ以降は宋商人の居住範囲が東に拡大して日本人居住範囲に進出し、混住が進み、唐房は徐々に実体を失っていったし、唐房の実体は排他的・閉鎖的な領域ではなく、かなりの日本人と共存した空間であったという（大庭 2019）。また、大宰府鴻臚館は11世紀後半までは継続しており、これと並行して博多の唐房内にも宋人の宿坊が存在したこと、博多浜には12世紀代まで継続する2つの官衙が存在し、交易や唐房を管理していたこと等も指摘されている（亀井 2015）。発掘調査の進展と検証が期待される。

博多に居住する宋の貿易商人は「博多綱首」と称された。博多綱首という表現は、13世紀の鎌倉期の史料に見られる。例えば、管崎宮の大神殿の四面玉垣（大防ぎ）の造営は、建長5年（1253）以降、堅糟西崎の所役であった。弘安年間の管崎宮造営時には、堅糟西崎の領主は二人おり、一人は「博多綱首」で「御分通事」の張興、もう一人は「同綱首」の張英で、張英は「鳥飼二郎船頭」という通称を持っていた（石清水文書「管崎宮造営材木目録」）。管崎宮は宋商とも関係が深い神社であり、その社領の一つは博多綱首が知行していた。博多居住の貿易商人である綱首は、その財力を利用して、管崎宮領を買得していたと考えられる。また「御分通事」とは大宰府の通訳を意味するのではなかろうか。

博多綱首を代表する一人が、建保6年（1218）に管崎宮の神官らに博多で殺害された張光安である。張光安は、「大山寄人博多船頭」（「仁和寺日次記」）、「神人通事船頭」（「華頂要略」）、「大山寺神人船頭」（「吾妻鏡」）、「通事船頭」（石清水文書）などと称されている。「博多船頭」＝「船頭」の船頭は綱首の日本的な表現とされる。「大山」＝「大山寺」は大宰府の天台宗寺院であり、比叡山延暦寺末であった。大山寺の寄人＝神人という表現から、張光安は大宰府の大山寺に帰属してその庇護を受けていたことがわかる。「通事」＝通訳も行っており、日本語も堪能であったと考えられる。この他、張光安は肥前国神崎庄とも関係が深かった（石清水文書）。複数の寺社や荘園領主といった権門に帰属し、その保護を受けて貿易を行っていたことが推測される。これは博多における権門貿易と称されている（林 1998）。ただし、日宋貿易における権門の主体的な関与のあり方についてはさらなる検討が必要である。

この殺害事件は、張光安が所属する大山寺の本寺・延暦寺と犯人側の管崎宮の本社・石清水八幡宮の争論となり、朝廷に訴訟が持ち込まれる大事件となった。延暦寺は、張光安の殺害地の博多津と管崎宮を山門領とすべきことを朝廷に訴えているし、神崎庄も張光安の死所博多管内と所領を神崎庄領にするように訴えている。これらは、いわゆる「墓所の法理」に基づいてその死所を帰属先が要求したものであるが、張光安が所領を有していたことも判明する。これは、先の張興・張英が管崎宮領を所有していたことと同様のパターンであると考えられる。

博多綱首を代表するもう一人が謝国明である。張興・張英・張光安らが、地元の博多で忘れ去られたのと対照的に、今日までも記憶されている点で珍しい存在である。謝国明は、博多では、宋から多くの文物、特に鯉鮓・蕎麦や鍼灸を伝えたとされているし、禅寺承天寺を創建し、開山の円爾（聖一国師）を援助した人物としてもよく知られている。なぜ謝国明のみ博多の人々の記憶に残って、他の多くの博多綱首たちが忘れ去られたのかは、今後検討する必要がある。

謝国明の事績の中で著名なのは、博多承天寺の創建と開山円爾への支援である。仁治3年（1242）秋、謝国明は博多の「東偏」に承天寺を創建し、第一世として入宋僧の円爾を招いた（「聖一国師年譜」）。博多では、栄西が開山となった聖福寺に続く禅寺の建立であり、博多で禅宗が栄える契機となった。

まさに謝国明は故郷中国の宗教文化を博多に直輸入したのである。宋の径山万寿寺が焼失し、円爾の師の無準師範が再興に尽力していた時、謝国明は無準に材木千板を日本から送った。これは従来、円爾との個人的な関係に基づく材木の寄進行為とされていたが、近年では、謝国明の商業行為であったという説が出されている（榎本 2008）。また、謝国明は、管崎宮領野間・高宮・平原を買得し、承天寺の寺領として寄進した（「省伯和尚承天寺掟案」）。承天寺の寺地は、地理的に管崎宮領那珂西郷に含まれる場所であり、おそらく寺地も謝国明が買得し、寄進したのではなかろうか。

宗像社関係の史料によると、宗像社領筑前国小呂島は、綱首謝国明が地頭と称して宗像社の社役を勤めないという状況にあり、その後、謝国明の「遺跡」はその後家尼と三原種延の間で裁判となっていた。これもおそらく、謝国明による買得行為によって、彼は小呂島地頭を称したものと考えられる。ただし、小呂島地頭としての得分がどのようなものであったのかは判然としない。

以上のように、博多綱首の活動は、13世紀代に多く所見がある。綱首（船頭）として日宋貿易に従事する他、寄人・神人として権門に帰属し、通事を兼ね、かつ所領を有するという共通項が浮かび上がる。唐房の所見が11世紀末から12世紀代で、博多綱首の所見が13世紀代に多く見られることの時代差をどのように理解するか。例えば、まず11世紀後半以降に博多に宋商人が居住するようになり、11世紀末までには唐房（中国人街）が形成され、そこから博多綱首といわれる有力な貿易商人層が形成されたという流れが想定されるが、その当否については今後の課題としておきたい。

このような日宋貿易の展開に伴う博多の都市化、唐房の形成や博多綱首の登場を考古学的に傍証するものがある。それは、大量に出土する宋の陶磁器、墨書陶磁器、中国風の花文軒丸瓦・押圧波状文軒平瓦、ガラス製品を鑄造した埴塼、結桶の井戸等であり（大庭他編 2008）、周辺地域に波及したものと、そうではないものがある。この221次調査地点では、主要輸出品の一つであった硫黄の破片が多く出土したことも注目される。近年注目されている薩摩塔は、西北九州から北部九州にかけてと南九州に主として分布しているが、多く貿易港寧波付近の梅園石が使用されているという（高津 2012）。この薩摩塔は、箱崎遺跡からは1点出土しているが、博多遺跡群からはまだ確認されていない。しかし、薩摩塔そのものは博多近辺にも現存しており、今後、石塔や石材そのものが博多遺跡群からも発見されることを期待したい。

（3）日宋貿易の管理と大宰府

大宰府は、古代以来、九州の統治と外交を担っていた。大宰府の長官である大宰帥の職掌に、「蕃客（外国使節）・帰化（外国人の日本への帰化）・饗饌（宴会）」がある。かつて、日宋貿易は、11世紀に荘園が増加し、不輸・不入の権限を持つ荘園内で密貿易が行われるようになったという森克己氏の考え方が支配的であった（森 2008）。しかし、この「11世紀荘園内密貿易説」に対して、山内晋次氏がこれを批判し、11世紀代には荘園内で密貿易が行われたことはなく、11世紀当時、依然として政府（大宰府）管理下での貿易が主流であったこと、12世紀前半までは政府の貿易管理が有効性を保って存続しており、博多津は政府の指定・管理する貿易港であったことが主張された（山内 2003）。この山内氏の見解によって、森氏の11世紀荘園内密貿易説に関しては否定されたと言ってよい。また、国家が海商の日本来航を管理した年紀制は、12世紀前半までは機能しているという（渡邊 2012）。さらに、長承2年（1133）の平忠盛の肥前国神崎庄による貿易船の所有権主張事件が契機となって政府の貿易管理が放棄され、貿易は寺社権門と商人の手に委ねられたという見通しが出されている（渡邊 2012）。

10世紀～12世紀前半における海商来着時の朝廷の対応は、海商来着→大宰府（西海道以外では来

着地の国司)→奏上→陣定(安置もしくは廻却を審議)→勅裁→官符(宣旨)による下達→大宰府(国司)による安置もしくは廻却の実施という一連の手続きがなされた(山内 2003)。

長治2年(1105)8月に博多に来航した泉州客人李充の関係史料が残っている(『朝野群載』巻20)。これによると、同年8月20日酉刻に筑前国那珂郡博多津志賀島(志賀島)前海に新来唐船が到来した。博多警固所は警固所解をもってこれを大宰府に報告した。これに関する文書を記すと以下のようになる。

①長治2年8月20日博多警固所解

②長治2年8月22日存問大宋国客記(存問記)

③崇寧4年6月提挙両浙路市舶司公憑

②の存問記は、博多警固所からの連絡を受けて、府宰直為末以下の府司が大宰府から派遣され、来航の宋人の存問を行った。特に「綱首姓名」「参来由緒」「隨身貨物」「本郷の公憑」「人徒交名(負名注文)」「乗船勝載」の提出が求められた。その結果、③の崇寧4年(=長治2年)6月の両浙路市舶司公憑が提出されている。この時の博多警固所解を引用しよう。

警固所解 申請申文事

言上 新来唐船老隻子細状

右、件唐船、今日酉時、筑前国那珂郡博多津志賀島前海到来者、任先例、子細言上如件、以解、

長治二年八月二十日

鑑取田口吉任

本司兼監代百濟惟助

博多警固所の本司・監代百濟惟助と鑑取田口吉任が、新来唐船1隻が8月20日酉の刻に筑前国那珂郡博多津志賀島(志賀島)の前海に到着したことを記した解である。博多警固所の所在地は福岡市中央区警固にあったとされるが、具体的には現福岡城内であったという(亀井 1986)。この説に従うと、博多警固所の役人は、現福岡城のあたりから博多湾の志賀島前海に唐船が到着したことを見て、大宰府に報告したことになる。大宰府からは府使が博多に派遣されて、宋商人の存問を行った。問題は、この221次調査地点の石積み遺構を誰の指示で誰が作ったのか、さらにその周辺にどのような施設があったのかということである。

まず、この石積み遺構は中国の技術で築造されていることが指摘されている。そうすると現地でこれを築造したのは、中国人、すなわち宋からの来航者や博多唐房の居住宋人たちであったと推定される。まだ大宰府の貿易管理が続いている時期に彼らが自分たちの意志のみで築造できるはずはなく、やはり大宰府の指示があったと考えるべきであろう。この石積み遺構の背面には井戸以外に遺構はなく、貿易を管理する関連施設があったとすると、さらにこの地点の外側にあったと考えられるが、それは今後の調査に期待するしかない。水の供給は港湾の要件の一つであり、井戸の存在は注目される。この施設を貨物の管理空間で保税区と推定し、石積みの背後に荷揚げ空間と管理空間があり、その背後に倉庫空間があるという想定(大庭 2022)も今後検討されるべきである。

7世紀代になると博多遺跡群の博多浜南側の砂丘上に1町四方の範囲で東西・南北方向をとる規則的な区画溝が確認されている。ここからは、官人が着用する鈐帶、円面硯、鴻臚館式軒丸瓦、皇朝十二銭、越州窯青磁等が出土しており、古代の官衙がここに設置されたと考えられている(池崎 1988)。さらにこれより北側の上呉服町付近では、イスラム陶磁器、緑釉陶器、製塩土器、塩焼壺、土師器・須恵器、「長官」と墨書した須恵器等が発見されており、これらも官衙に関係する遺物とされている(同)。明確な官衙遺構はまだ出土していないが、ここで想定されている官衙は当然、大宰

府の出先機関であり、機能は港湾と貿易の管理にあったと考えられる。博多地区にも鴻臚館（筑紫館）時代から何らかの管理施設があったという想定が可能である。そうすると、今回の石積み遺構もこの官衙との関連性が考えられるが、詳細は今後の調査・研究を待ちたい。

2. 博多の港

(1) 博多の港の沿革

近世の博多の港は、当初、中洲の北端にあったが、那珂川の河口部に位置するため、次第に土砂が堆積し、港湾としての機能が維持できなくなった。このため、同じ那珂川の河口部であるが、博多側に移転し、寛政3年（1791）に新港湾が完成した（宮崎編 2005）。いずれも那珂川の河口部に位置したことが注目される。

古代・中世における博多の港はどこにあったのか。福岡藩の近世地誌を代表する貝原益軒編『筑前国続風土記』は、巻4博多において、「袖湊」という港湾が博多にあったことを記している（貝原 1973）。

袖湊

いにしへ博多にありし入海を袖湊といふ。唐船の入し港なり。昔博多の東北に入海あり。西北より入て、東南にいたり、住吉の辺、堅糟のあたりまでも、斥地なりしとかや。又博多の西南も、今のかたはら町、港橋の辺までは、皆西北の海に臨めり。海水此辺の少東南にとゞまり、猶其東南は、斥地なかくつゞき、那珂川は斥地の中を流て、海に入る。入海は今の寺町の西北より、港橋ある辺まで、博多の中間を打ちめぐり、東北の入海と、西北の大海と相通す。是を中海といひて、唐船の入し所なり。中比奥浜といひし所は、入海の中にありし洲なり。中海東北の方はひろく、西北の方はせはし。西北の方、今の港橋ある辺に、長き橋ありて、通路とせり。此入海博多の中を打ちめぐりて、袖のかたちのことくなりしかは、袖湊と名付しにや、今博多の入定寺と本岳寺の間より、港橋迄、東西に溝とほれり。今是を大水道と云、是袖湊の残れる也。唐土船の泊りし所なれば、さばかり大なる港なるへきに、古今の変替かくの如し。港橋と云も、袖湊の残される溝にかけし故也。今博多と松原との間に流るゝ比恵川は、むかしは住吉と博多の間を流れて、瓦町の西の辺にて、那珂川に入ぬ。博多の東北には、昔は川はなく、袖湊の入海ありし也。

大意は以下の通りである。昔、博多にあった入り海を袖湊（袖の湊）と言う。唐船が入った港である。昔、博多の東北に入り海があった。西北より入って東南に至り、住吉の辺り、堅糟の辺りまでも斥地（潟地＝湿地・干潟）であったという。また、博多の西南も、今の片原町、港橋の辺りまでは、皆西北の海に面していた。海水がこの辺りの少し東南に留まって、なおその東南は潟地が長く続き、那珂川は潟地の中を流れて海に入った。入り海は今の寺町の西北から、港橋がある辺りまで、博多の中間を打ちめぐり、東北の入り海と西北の大海と通じていた。これを中海と言ひ、唐船が入ったところである。中ごろ、奥浜（息浜・興浜・沖の浜）と言ったところは、入り海の中にあった砂州である。中海は東北の方が広く、西北の方は狭い。西北の方角、今の港橋がある辺りに長い橋があつて、通路としていた。この入り海は博多の中を打ちめぐって、袖の形のものであつたので、袖湊と名付けたのだろうか。今、博多の入定寺と本岳寺の間から港橋まで、東西に溝が通っている。今、これを大水道と言う。これは袖湊が残ったものである。唐土船が停泊したところであるので、それほど大きな港であるはずだが、古今の変遷はこのようなものである。港橋と言うのも、袖湊の残った溝に掛けたからである。今、博多と松原との間に流れる比恵川は、昔は住吉と博多の間を流れて、瓦町の西の辺りで那珂川に入っていた。博多の東北には、昔は川はなく、袖湊の入り海があつたのである。

近世における博多の地形や港湾の位置に関する考え方がよくわかる記述である。中世の博多は、陸側の博多浜（旧博多部）と海岸側の息（おきの）浜（はま）（興浜）の2地域に分かれていた（佐伯 1987）。両者は地形的にも政治的にも異なる特徴を持つ空間であった。この貝原益軒の理解は、博多浜と息浜と中間に入り海があり、そこに唐船が入港したこと、中間の入り江は、その形から、袖湊（そでのみなと）と呼ばれたが、近世に至っては、すでに往時の名残はなく、大水道という博多を東西に貫く溝がその名残としてわずかに残るのみであった、というのである。これらの古博多港観は、近世以降に見られる「博多古図」（中山 1984）の地理観と一致している。

この貝原益軒の理解に関しては、問題点も多い。まず「袖湊」というのは、平安期の和歌の世界で詠まれた歌枕であって、本来実在の港ではなかった（佐伯 1988）。しかし、ある時期から博多に実在する港と考えられるようになり、16世紀末には「実在」していた。それは、秀吉の九州出兵や朝鮮出兵のために九州に下向した細川幽斎・木下勝俊といった武家歌人たちが、博多で袖湊を実見しているからである。木下勝俊は、文禄元年（1592）正月、博多に来て、袖の湊を宿の主人の案内で見学した。この時、勝俊は、「あるじの云く、今こそ汐のさしき、水も少しはべれ、常は無下にいふかひなく候物をとぞ申しける、誠にまろこし舟よせつべき浦ともおぼえず」と記している（「九州のみちの記」）。見学した時は潮が押し寄せ、水も少しあるという状態であったが、普段は全くとりあげて言うほどの価値もないものであると聞き、「唐船がやって来た港とは思われない」という感想を述べている。本来が歌枕であったわけで、益軒が言うような唐船がここに入港したというものでもなかったから、この感想はむしろ当然のものであるといえる。

では、細川幽斎や木下勝俊が実際に見た「袖の湊」は博多のどこであったのか。これは、歌集や紀行文には詳しくは記されていない。益軒は、博多の東北の入り海を強調している。近世前期の博多の絵図を検証すると、博多の西側に深く切り込んだ水路が描かれており、正保3年（1646）の絵図には、その水路に「袖ノ湊」と記されている（佐伯 1988）。安見有定「筑陽記」（1705年）には、「袖の湊、往昔唐船を繋ぎし所也、今ハ川端町と云所に織（ほそ）き溝川に小橋あり。古の湊の遺跡也とて湊橋と号す。此川筋、市中を北に流れて石堂川に入ル。昔ハ此川より西ハ入海にて其形衣の袖に似たるとて号けるとかや」と記している。袖の湊の名残は、博多の西側の「織き溝川」であるというのである。近世絵図の記述と照らしても、これが近世に伝承されていた袖の湊の跡と考えられる。そうすると、その場所は、博多浜と息浜の間の西側の空間ということができる。細川幽斎や木下勝俊が見て、勝俊が落胆した場所は、この細い溝川であったと考えられる。

（2）地図・文献史料からみた博多の港

中世の史料で博多の港について言及しているものを見ていきたい。文明12年（1480）9月に博多を訪れた連歌師飯尾宗祇は、博多から見た景観を次のように記している（福田他校注 1990）。

明ぬれば、此所の様を見侍るに、前に入海遙かにして、志賀の島を見渡して、沖には大船多くかゝれり、唐土人もや乗けんと見ゆ、左には夫となき山ども重なり、右は箱崎の松原遠く連なり、仏閣僧坊数も知らず、人民の上下門を並べ、軒を争ひて、その境四方に広し（「筑紫道記」）

博多の町の前面には入り海（博多湾）が遙かに広がり、志賀島を見渡して、沖には大船が多く停泊している。唐人も乗っているように見える。左手には山々が重なって、右手には箱崎の松原が遠くまで続き、仏閣僧房は数えられないほど多い。人々の家が門を並べ、軒を争い、その境は四方に広い。仏寺が多く、人家が多い都市博多の繁栄する様が記されている。大船は博多湾の沖に停泊しており、港湾として栄えている様子がうかがえる。この「まろこし人もやのりけんと見ゆ」というのは、博多や

袖の湊の唐船・唐人を詠んだ平安時代の古歌を下敷きにした表現であり、実際に宗祇が見た博多湾の大船に唐人が乗っていたわけではない。朝鮮使節宋希璟が1420年に来日した時、朝鮮から乗ってきた楼船は志賀島に置き、小舟に乗り換えて博多に到着した。おそらくこれが博多に貿易船や外交使節の船が着岸する時の一般的なパターンであったと考えられる（伊藤 2021）。

大内氏が主導権を握った天文8年（1539）度の遣明船派遣に際して、遣明副使策彦周良の日記に、「俾当津編戸民掘船江、大光・東禅・吉治及予、往而觀之」（「初渡集」天文8年正月28日条）とある（牧田諦亮 1955）。当津＝博多の住人に船の入り江を掘らせ、博多滞在中の策彦らはそれを見物に行った。遣明船関係の船が着岸するための港の整備を行ったのである。具体的に博多のどこをどのように整備したのかは不明であるが、整備の主体は大内氏であろう。

1558年、豊後の大友宗麟はイエズス会に博多の一部を寄進した。イエズス会はそこに教会を建て、布教を行ったが、「同地所には、コスメが建てた我らが教会があつて地所は海まで続き、我らの浜に上陸する者は昔に定められた税を我らに払う」（1562年12月10日バルタザール・ガーゴ書簡）ということになっていた（松田毅一監訳 1998）。この教会は大友氏領息浜の中にある倉所町付近にあった。つまりイエズス会領の博多は、息浜西部の海岸近くにあったのであり、その浜に上陸する者に対して、イエズス会から上陸税つまり津料（入港税）が掛けられた。

（3）地形学・考古学的所見

中世の港はしばしば川の河口部に存在した。博多も同様であったことは先述の通りである。後世に「袖湊」と呼ばれた博多の港湾は博多の東側にあったのではなく、西側にあったと推定した。博多の東を流れる御笠川（比恵川・石堂川）は本来、博多の南から西側へと流れており、16世紀後半に都市の東側が開削されたことによって東側を流れるようになったとされる。

博多遺跡群の発掘成果をもとにして、地下に存在する旧地形＝埋没地形を復元しようとする試みがなされている（磯他 1998）。これによると、博多浜に二つの砂丘（砂丘Ⅰ・Ⅱ）があり、息浜には一つの砂丘（砂丘Ⅲ）があったことが判明した。これは現地形にも反映している面がある。この成果をもとに、各年代の海岸線が推定されている（磯他 1998）。この博多浜と息浜の間には、西側に湾入があり、これが16世紀末の「袖の湊」や近世の大水道につながる。これは、那珂川の河口部に位置し、河口部の港の事例である。

発掘成果によると、まず博多浜と息浜の中間の呉服町交差点付近は、12世紀初頭にはすでに陸地化しており、博多浜と息浜を結ぶ陸橋状の砂州となっていたことがわかっている（池崎 1988）。息浜は、「蒙古襲来絵詞」の文永の役の記事が初見であり、中世後期には博多の貿易の中心地になっていく（佐伯 1987）。ここには、13世紀後半に元寇防塁（石築地）が築造され、九州の武士達が定期的に警固する防衛の拠点となった。この蒙古襲来－元寇防塁の築造－鎮西探題の設置といった軍事的・政治的な出来事によって、博多の町も大きく性格が変化する。息浜は12世紀後半以降に形成された新開地で、蒙古襲来以降に急速に都市化し、15世紀後半以降になると、元寇防塁を超えて町場が拡大する（大庭 2019）。中世後期の博多の発展は、息浜を中心に展開したといっても過言ではない。

博多遺跡群では、息浜の西側で埋め立てや護岸の跡が見つかっている。博多第89次調査地点（福岡市博多区下川端）では、16世紀後半の石積み護岸跡と船着き場と考えられる石敷遺構が発見された（福岡市教育委員会編 1998）。博多第96次調査地点（福岡市博多区下川端）でも、89次から連続すると考えられる石積み遺構が検出された（福岡市教育委員会編 1999）。これらは息浜の南西縁の砂丘上に作られたもので、中世末期の港湾施設である。16世紀後半の博多の港は、博多浜と息浜の間の

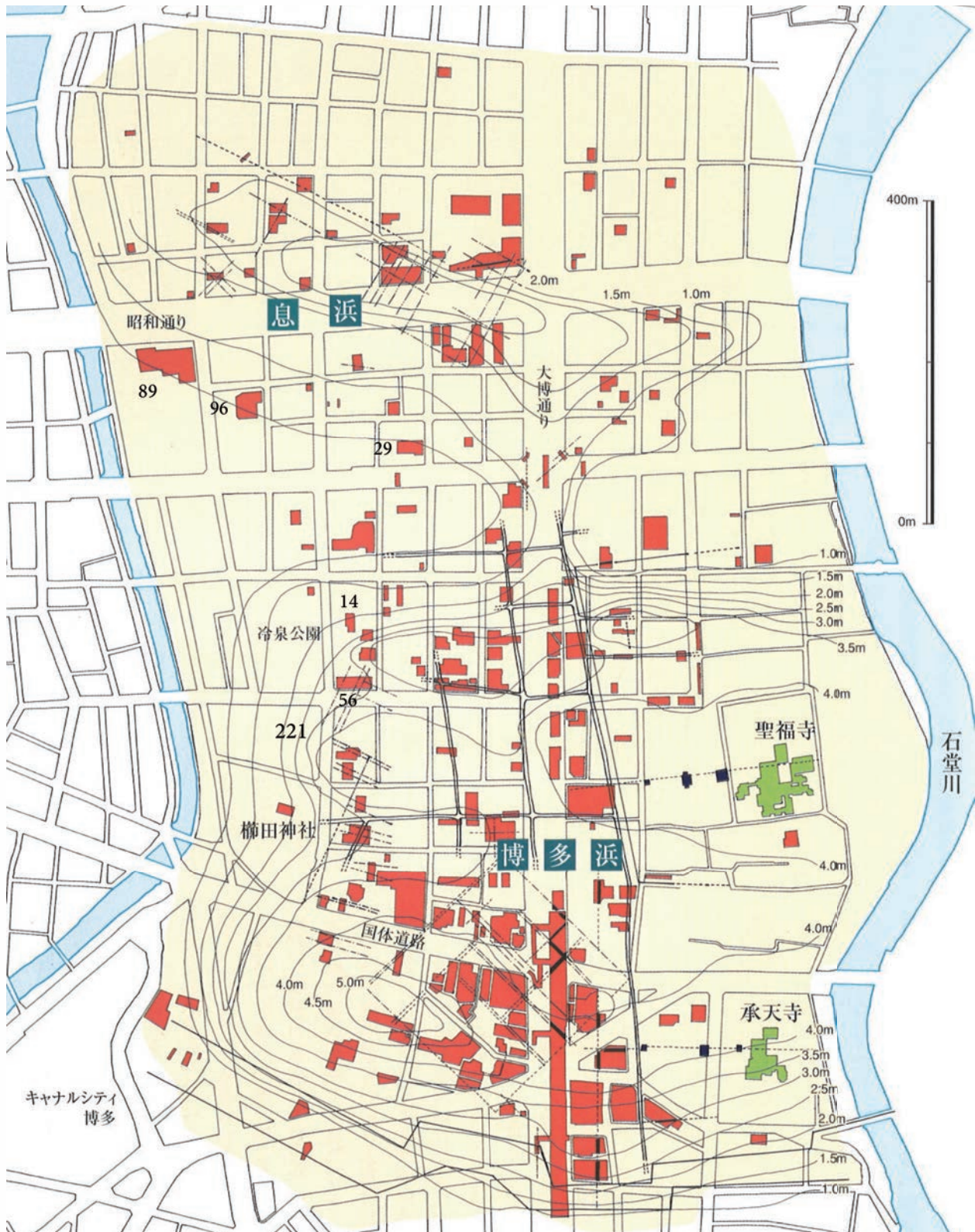


図 中世博多の旧地形と町割り

等高線は中世の遺構面の高さを示す。

(本田 2008 図 1 に関係調査次数を追加)

息浜側に形成されており、17世紀初頭に埋め立てられるまで機能していた。

同じ息浜の南側に位置する博多29次調査地点（福岡市博多区綱場町22-67）では、17世紀初頭の2期にわたる埋め立ての跡が確認された（常松 1998）。これは、博多89次・96次の埋め立てと同じ時期と考えられている。したがって小早川氏と黒田氏による2回の埋め立て＝都市の整備によって、中世都市博多は大きく変貌したのである。博多89次・96次・29次を結ぶ線の南側（博多浜側）に中世の港が存在した可能性が高い。89次と96次の石積み遺構は、その中世最後の時期の港湾を示している。近世初頭に埋め立てられて、近世地誌や近世絵図に記される湾入や大水道として、中世の港の名残が残ったことになる。

（3）貿易陶磁の大量出土と221次調査地点

ここで博多221次調査地点周辺の発掘調査に目を転じてみよう。221次調査地点の北に位置する博多第14次調査地点（福岡市博多区店屋町4-15）では、白磁の山が見つかった（池崎・森本 1988）。博多浜北西部の入り江の入り口に位置し、当時の波打ち際にあたる場所である。白磁がほとんどで、80個を超える数である。12世紀初頭ごろ、貿易船から陸揚げされる際に、船中で壊れた陶磁器を波打ち際に廃棄したものだと考えられている。港に近接した場であったと考えられる。

14次調査地点と221次調査地点の間に位置する博多第56次調査地点（福岡市博多区店屋町4-1）では、第Ⅲ面のSK0281土壌から大量の陶磁器が出土した（福岡市教育委員会編 1993）。約500個の陶磁器で、白磁がほとんどであったが、いずれも破損していた。1メートル四方の木箱に、貿易船からの陸揚げ後に割れた陶磁器を投棄したものと考えられている。これは14次調査地点のように波打ち際ではないが、位置的にその近くであると考えられる。

221次調査地点は、こうした日宋貿易の輸入品が大量に廃棄された地点の南側にあり、状況的に港湾施設＝石積み遺構が作られる地理的な条件を備えていた。ここに日宋貿易に関係する港湾施設が築造されるのは十分に理解できる。

（4）大乘寺と大乘寺前町

221次調査地点では、大乘寺の建物の明確な遺構は検出されなかったが、「大乘寺」銘の瓦や近世墓地が発見されている。遺跡の北端に面して、大乘寺関係の遺物も現存している。ここでは、博多大乗寺に関して少し言及しておきたい。大乘寺は、原位置から大正9年（1920）に市内大手門に移転したが、戦災で焼失した。

貝原益軒編『筑前国続風土記』巻4博多では、大乘寺に関して以下のように記している（貝原 1973）。

大乘寺 真言宗

法皇山宝珠院と号す。むかしは律宗にて西大寺の末寺也。亀山法皇の勅願寺也。故に法皇山の号あり。永禄八年の比より浄土宗となりぬ。正保元年国君忠之公是を改て真言宗としたまふ。本尊は弘法大師の作千手観音なり。什物に宝珠あり、美玉也。径一寸三分あり。かゝる宝珠は日本におゐては稀なるべし。西宮の剣玉、嵯峨鹿王院の玉など、同日の談なるべし。忠之君より東照権現の神像を此寺に安置せられ、毎月十七日に参詣したまふ。尊像は狩野探幽筆也。寺産百石の地を寄附したまふ。荒戸山に東照宮の神祠を立てたまひしは、此後の事なり。大猷院君御薨逝の後、御法事も此寺にて行はる。凡博多に七観音とて名仏あり。大乘寺千手観音弘法の作、妙音寺正観音雲慶作、観音寺正観音雲慶作、聖福寺千手観音定朝作、乳峰寺十一面観音作者不知、龍宮寺正観音慈覚大師作、以上六観音也。今一仏詳ならず。東長寺に古仏の千手観音あり。是や七観音の内なるべき。当寺の観音には、毎月

十七十八日参詣の人多し。

これによると、昔（鎌倉時代）は西大寺末の律宗寺院で、亀山法皇の勅願寺であったため、法皇山の山号となった。永禄8年（1565）ごろ浄土宗となり、正保元年（1644）に藩主黒田忠之の命によって真言宗となったという。『筑前国続風土記附録』巻6博多中には、大乘寺は新川端町上にある真言宗寺院であり、寺伝によると、大同元年（806）に弘法大師が唐から帰国して、自ら彫った千手観音をこの寺に奉納したこと、建治3年（1277）、西大寺の叡尊が亀山法皇の勅命によって筑前に下向し、本寺を再興したことを記している（加藤・鷹取 1977）。

「西大寺末寺帳」には博多の大乘寺の名前が見えている。寺伝通り、中世においては西大寺律宗寺院であったことは間違いない。この博多大乗寺に関しては、「一つは、蒙古襲来を機として、異国降伏を祈るために奈良・西大寺末として博多に大乘寺が建立されたことである。九州の西大寺末は、最北部の豊前規矩郡の大興善寺から、南は大隅種子島の慈遠（音）寺に至っている。とくに博多の大乘寺は、鎌倉の極楽寺と東西呼応し、北条氏得宗・一門の海陸交通拠点の掌握と複合して大陸文物の受容をおこなっていたとみられる」とされている（川添 1981）。さらに、博多大乗寺は、九州を代表する西大寺末であり、鎌倉極楽寺や称名寺のように、那珂川の管理（殺生禁断権）と博多港の管理を任されていた可能性が高く、地藏信仰を媒介とした博多の都市民との信仰関係があり、葬送を担当し、地獄での救済を担う寺であったと指摘されている（松尾 2006）。さらなる中世史料の発掘が望まれる。

近世の大乘寺は新川端町上にあったが、大乘寺の東側には現在の土居通りに面して、大乘寺前町があった。これは大乘寺の門前町であったが、こうした寺院名を冠した門前町は、承天寺前、聖福寺前など、中世から確認される。寺の歴史の古さから言って、大乘寺前の門前町も中世から存在した可能性がある。

おわりに

以上、日宋貿易と博多の関係をもとに、221次調査地点出土の石積み遺構の築造は、大宰府の関与の可能性が高いこと、本地点は、中世の博多の港があった湾入部分に位置し、ここに港湾施設が造られるのは妥当性があることを述べてきた。遺構の築造を直接物語る文献史料がないため、その搜索が今後必要である。また、今後の周辺の発掘調査の進展によって、石積み遺構の性格と関連施設の存在・有無が明確になるに違いない。

この石積み遺構は、12世紀中ごろの洪水によって廃絶したとされている。博多における日宋貿易はこれ以降も継続しており、本石積み遺構の後継となる何らかの港湾施設がいずれかに造られたはずである。その探索も今後の課題であるが、本石積み遺構と同様に、博多の西側の湾入部に造られたものと推定される。

文永6年（1269）9月、蒙古の意向を受けた高麗使の一行が対馬に到着した。文永の役の5年前である。この時の関係史料に、「牒、得太宰府去年九月二十四日解状、去十七日申時、異国船一隻、来着対馬島伊奈浦、依例令存問来由之处、高麗国使人参来也、仍相副彼国并蒙古国牒、言上如件者」とある（『本朝文集』67、文永7年正月日日本国太政官牒）。つまり、大宰府が文永6年9月24日付けで解状を記し、朝廷に提出したのである。ここで「依例令存問来由」（例に依り、来由を存問せしむ）という大宰府の行為が注目される。これはまさに平安時代に外国船に対して大宰府が行っていた存問である。もちろん当時は、鎌倉幕府が大宰府機構を押さえ、鎮西奉行である大宰少貳武藤氏が統括していたので、平安時代と全く同じではなく、長治2年のような博多警固所の解もない。しかし、大宰

府が外国船を存問し、これを朝廷に報告するという慣例が13世紀後半においても残っていたことは注目すべきである。

参考文献

- 池崎譲二 1988 「町割の変遷」、川添昭二編『よみがえる中世1 東アジアの国際都市博多』平凡社
- 池崎譲二・森本朝子 1988 「海を越えてきた陶磁器」、『よみがえる中世1 東アジアの国際都市博多』平凡社
- 磯望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林茂・佐伯弘次 1998 「博多遺跡群をめぐる環境変化」、小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
- 伊藤幸司 2021 『中世の博多とアジア』勉誠出版
- 榎本 渉 2005 「『栄西入唐縁起』からみた博多」、『中世都市研究11 交流・物流・越境』新人物往来社
- 榎本 渉 2008 「『板渡の墨跡』から見た日宋交流」『東京大学日本史学研究室紀要』12
- 大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編 2008 『中世都市博多を掘る』海鳥社
- 大庭康時 2019 『博多の考古学』高志書院
- 大庭康時 2022 「中世博多の港湾遺構」、『中世学研究会第4回シンポジウム 中世・港の景観』中世学研究会
- 貝原益軒 1973 『筑前国続風土記』名著出版
- 加藤一純・鷹取周成 1977 『筑前国続風土記附録 上巻』文献出版
- 亀井明德 1986 『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎
- 亀井明德 2015 『博多唐房の研究』亜州古陶瓷学会
- 川添昭二 1981 『中世九州の政治と文化』文献出版
- 佐伯弘次 1987 「中世都市博多の発展と息浜」、川添昭二先生還暦記念会編『日本中世史論攷』文献出版
- 佐伯弘次 1988 「まぼろしの港」(『よみがえる中世1 東アジアの国際都市博多』平凡社)
- 高津 孝 2012 「薩摩塔と礎石：浙江石材と東アジア交流」『江南文化と日本：資料・人的交流の再発掘』復旦大学
- 田島 公 1993 「日本、中国・朝鮮対外交流史年表―大宝元年～文治元年―」、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編『貿易陶磁―奈良・平安の貿易陶磁―』臨川書店
- 常松幹雄 1998 「博多遺跡群にみる埋立について」、小林茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
- 中山平次郎 1984 『古代乃博多』九州大学出版会
- 林 文理 1998 「博多綱首の歴史的位罫―博多における権門貿易」、『古代中世の社会と国家』清文堂
- 福岡市教育委員会編 1993 『博多34』福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会編 1998 『博多61』福岡市教育委員会
- 福岡市教育委員会編 1999 『博多68』福岡市教育委員会
- 福田秀一・岩佐美代子・川添昭二・大曾根章介・久保田淳・鶴崎裕雄校注 1990 『新日本古典文学大系51 中世日記紀行集』岩波書店
- 本田浩二郎 2008 「中世博多の道路と町割り」、大庭他編『中世都市博多を掘る』海鳥社
- 牧田諦亮 1955 『策彦入明記の研究上』法蔵館
- 松尾剛次 2006 「博多大乗寺と中世都市博多」、『鎌倉遺文研究』17
- 松田毅一監訳 1998 『十六・七世紀イエズス会日本報告集 III期2巻』同朋舎

- 宮崎克則編 2005 『古地図の中の福岡・博多』 海鳥社
- 森 克己 2008 『新編森克己著作集第1巻 新訂日宋貿易の研究』 勉誠出版
- 山内晋次 2003 『奈良平安朝の日本とアジア』 吉川弘文館
- 渡邊 誠 2012 『平安時代貿易管理制度史の研究』 思文閣出版